no.34

CLCからしだね書店便り

October 2023 10

＊今月のご案内＊

① 読書感想本『はだしのゲン』

② 第７回日本伝道会議（JCE7）に参加して

「先生」ではなく「さん」で呼び合う

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル

営業時間　11:00-17:00

定 休 日　日曜日と年末年始（祝日も営業）

毎月第３木曜日は書店のみ営業

こどものための神のものがたり

語る人：大頭　眞一

第10回　じっかい

2枚のいしのいた
そこには神さまのこころが
きざまれていました
神さまといっしょにいるための
10のたいせつなこと
1　あなたは神さまのもの、悲しみをふっとばせ
2　神さまは目にみえません、
　　見えるのは人となったイエスさまだけ
3　神さまに愛をこめて話かけていいんだ
4　神さまといっしょに楽しむ時間を！
5　だれかをにくんだら神さまに受けとめてもらえる
6　みたされない思いを神さまに受けとめてもらえる
7　神さまに抱かれているから、たがいに愛し合える
8　神さまに抱かれているから、
　　奪い合わないでいられる
9　神さまに抱かれているから、
　　いやしのことばを語ることができる
10　神さまに抱かれているから、
　　与え合うことができる

大頭　眞一 おおず しんいち
1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ（BA、MA）と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、炭き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

おとなのための　神の物語

子どもだったみなさんへ

●1
まず出エジプト、そしてシナイ山。この順序をまちがえることがありませんように。よいことをしたからでもなく、よい民であったからでもなく、イスラエルは救われました。ただ神さまのあわれみによって。

●2
十戒ではなく十誡。神さまと共に歩く歩き方を教える十のことばです。守ったら救われ、守らなかったら滅ぼされるという戒めではありません。成果を要求してたがいに比べ合うためのものでもありません。

●3
子どもたちにも10のお約束だと言わないでください。イスラエルにはできなかったことが、彼らにはできるのですから。イエスによって、聖霊によって。それをきまたげる痛みを癒すのは、神さまに抱かれることだと語ってください。

和紙ちぎり絵：森住　ゆき もりずみ ゆき
群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「アメイジング・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」（いのちのことば社）、「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」（日貿出版社）がある。埼玉県在住。

こだわらなければならない怒り

『はだしのゲン』

（中沢啓治作・絵　汐文社　8,000円［コミック版10巻セット］＋税）

単なる損得勘定で動くのが利己主義で、自分の当然の権利が侵害された時に感じる「怒り」を原動力とするのが個人主義であるとすれば、利己主義と個人主義は似て非なるものです。損得の観点では、自ら権利を放棄する方が得策であるような場面はたくさんあるでしょうし、「長い物には巻かれろ」とか「寄らば大樹の陰」が世故に長けたこととして勧められるような社会では、個人主義を貫こうとすれば、「小さなことにこだわる頑固者」とか「空気が読めないやつ」とけむたがられることでしょう。だから個人主義的に生きるということは実はとても大変なことです。

そんな世の中にあって、怒りを持ち続けることや、「しかたがない」と言ってごまかさないこと、こだわり続けることをあくまで称揚し、個人主義を力強く擁護してやまない作品があります。中沢啓治氏の『はだしのゲン』です。

『はだしのゲン』には「原爆の非人道性を訴える漫画」という印象を持っている人が多いかもしれません。その印象は決して間違ってはいないのですが、この作品はそれだけにとどまりません。汐文社版全10巻の『はだしのゲン』で、原爆が炸裂するシーンが描かれるのは、第1巻の終わりから第2巻の始めにかけてです。それ以降は原爆と戦争によって家族を失った子どもたちが、破壊された生活を取り戻す姿が描かれます。その過程で、ゲンたちは同じ戦争の被害者どうしが憎しみ合い、いがみ合う姿を目にします。同じ戦争による被害でも、その程度や内容はまちまちです。比較的被害の少ない者が、より悲惨な境遇にいる者を差別し、やるせない怒りを彼らに向けることで解消するのです。

そのような人々の姿を見て、ゲンもまた怒りを燃やします。しかしゲンは、その怒りをしかるべき相手に向けてちゃんとぶつけるまでは、どうしても我慢ができません。だから、厳しい生活の中で口癖のように「しょうがない」という兄に対して、ゲンは言います。

わしゃ　いつも　ふしぎだと　おもって　いたんじゃ
戦争で　息子や　とうちゃんを　殺され　ピカで
みんな　殺され　いまも　苦しんで　いるのに　みんな
しょうがないと　あきらめて　本当のことに　しらん
顔じゃ　とうちゃんが　いうとったじゃ　ないか　ひと
にぎりの　金持ちが　もうけるために　国のためじゃ
天皇のためじゃと　いうて　戦争をおこして　わしらや
隆太を　苦しめているんだ　戦争を　おこした　犯人
と　協力して　ぬくぬく　生きている　犯人が　いるん
じゃ　ピカをおとした　犯人が　いるんじゃ　その犯人
を　二度と　ひどい目に　あわんよう　はっきり　たた
き　つぶさんと　いけんのじゃ　いまに　また　おなじ
ことを　くりかえすわい　そして　しょうがないと　泣
くんじゃ…
（第5巻48～49頁）

また、市による「平和都市建設」という大義名分のもと、苦労して建てたゲンの家が強制的に取り壊される場面でも、ゲンは徹底的に抗戦します。そして抵抗むなしく業者によって無残に家が破壊されると、ゲンはその場で拾った釘を自分の手の甲に打ち付け、屈辱と恨みを体に刻み付けます。

痛みと　くやしさを　忘れ　かけたら　この傷を　み
つめて　怒りの　気持ちを　燃やすぞ…　うううう　権力
の　無法さに　わしは　いつまでも　いつまでも　たた
かいの　気持ちを　燃やし　つづけて　やるぞ…　許し
て　たまるか…　許して　たまるか…　ちくしょう　ち
くしょう　ちくしょう
（第9巻31頁）

赦すことの美徳が語られることが多い中、中沢啓治氏は『はだしのゲン』で、怒りを忘れず闘い続けるゲンの姿を一貫して描きます。このようなゲンの姿勢は、作者である中沢氏のそれでもあったようです。中沢氏は『はだしのゲン わたしの遺書』（朝日学生新聞社）の中で、原爆を扱った最初の作品『黒い雨にうたれて』執筆の経緯を振り返って、次のように語ります。

それまで原爆を扱った文学作品などは「原爆を受けて悲しい」という論調のものが主流でした。「あれは戦争だから、しょうがない」と。
ぼくはそれではいかんと思いました。「エレジー（哀歌）」ではだめなのです。絶対に「怒り」なのです。「しょうがない」で逃げられる問題ではない、とことんこれを問題にしなくちゃいけないと思いました。
（Kind版『はだしのゲン わたしの遺書』20頁）

中沢氏のこの怒りは、センチメンタリズムで薄められるこ

となく、『はだしのゲン』のいたるところで徹底的に表現されています。作中、ゲンが泣くシーンは頻繁に出てきますが、彼が泣くのは悲しみからではなく、むしろ自分や家族が被った不正や理不尽に対する悔しさや、戦中は軍国的・翼賛的なことを言っておきながら、戦後はそれを忘れておめおめと平和主義をうそぶく無責任で世渡り上手な日本人に対する憎しみからなのです。

こうした徹底的な責任追及の姿勢と、怒りを貫徹させねばやまないという激しさが、『はだしのゲン』を特別な作品にしています。戦争と原爆の悲惨さを、悲しみや儚さといった曖昧な美しさにつながるセンチメンタリズムで誤魔化すことなく冷徹に描き切ることで、『はだしのゲン』は、「かなしい」という感情で責任をうやむやにし、怒りを忘れて倫理的な解決をつけようとしない日本人の気質に対する鋭い批評になったのです。

こうした激しさ・徹底性ゆえに、『はだしのゲン』は読む者に忘れられない印象を残します。しかしこの「ゲン」の持つエネルギーは、原爆とその後の被爆者差別を経験した中沢氏でなければ描けないものだったのだと思います。現在の作家が「ゲン」と同じような猪突猛進型の主人公を描いたとしたら、単なる独善的なキャラクターになってしまうでしょう。ピカの爆風で焼けただれた皮膚に湧く蛆虫、被爆者への陰湿ないじめ、朝鮮特需で儲けまくる元軍人、ゲンの願いもむなしく死んでいく家族や仲間…。これらすべての描写があるからこそ、ゲンの怒りと行動は説得力をもち、読者の胸を突くものとなるのです。

自分の正義を振りかざして自己を顧みないという姿勢が、歯止めの利かない暴力を生むという危険性はあります。しかしだからと言って、自分の中にある屈辱感や、正義や権利を踏みにじられたときに感じる怒りをないがしろにしていいということにはならないはずです。なぜなら、そこに最後までこだわることが、自分の人間性を守ることになるからです。だからこそ、そこだけは決して誤魔化してはいけないのだということを、「ゲン」は教えてくれます。これもまた、『はだしのゲン』がこれからも読み継がれるべき作品であることの理由の一つだと思うのです。

【書店員　凱】

「先生」ではなく「さん」で呼び合う

第7回日本伝道会議（JCE7）に参加して

社会福祉法人ミッションからしだね
理事長　坂岡隆司

9月に岐阜市で行われた、第7回日本伝道会議に行ってきた。日本の特に「福音派」に属する人たちの集まりで、今回で7回目だそう。（このところ7年ごとに行われている）。私は、今回初めて参加した。残念ながら2日程ではなかったが、それでも関心のあるテーマのいくつかの分科会に出たり、数十団体が出展したいろいろなブースを回ったりして様々な良い刺激を受けた。また親しい人との久しぶりの再会や新しい出会いもあり、楽しい貴重な機会となった。コロナ禍を経て、今回はオンラインも併用され、参加の仕方にも幅ができたのではないかと思う。多くの方々と共に学び、語り、祈りあうことができた。やはりこうして人が顔を合わせて集まるというのはよいものだなあと感じた。以下、特に心に残ったいくつかのことを書きたい。

一つは、お互いの呼称は「先生」ではなく「さん」で、と呼びかけられたこと。

今回の会議では、連携、ネットワーク、一致、協力、協働といった言葉が強調されていた。大会会長の挨拶にも、「霊をひとつにして、……こころを一つにして……」（ピリピ1:27）が引用されていた。準備段階の昨年4月のクリスチャン新聞にも、「牧師と信徒の関係を横の関係にし、共に福音のために労する仲間であることを確認したい」という実行委員の方の言葉が出ていた。牧師も信徒も、偉い先生も新人も関係なく、みな福音のために労する同志であるという意味では同列である。にもかかわらず、日本の教会における「先生」呼称は、そこに無用な壁を作ってしまう危険があるとの認識から、この呼びかけは来ていると思う。じつは、この話は以前からことあるごとに言われてきたが、なかなか議論が広がらない。牧師の権威のためには先生と呼ぶべ

き、という人もいるが、私はそうは思わない。先生は、その人が本当に先生と呼びたい人にだけ使ったらよい。それより、猫も杓子も先生と呼び合うことの弊害の方が多いように思う。これからのキリスト教界に求められている自由で動的な横の繋がりを構築していくためには、まずはそういう素地をつくらねばならない。そのとき、先生ではなく「さん」で呼び合うことは一つの知恵だろう。言葉の使い方ですべてが解決するというものではないが、でもそうすることで人の意識は少しずつ変わり、社会の根っこにある問題を指し示すことにもなる。今回の呼びかけ、この大会だけの一時のパフォーマンスで終わってほしくない。

二つ目は、女性の出番が少なく活躍が目立たなかったこと。これほどジェンダー平等が言われている時代に、極端に少なかった印象が強い。そもそも、企画や実行委員会にどれだけの女性が関わったのだろう。会長、実行委員長、プログラム局長、開催地委員長、開催地委員、すべて男性牧師（信徒はいない）である。セッションの講師、パネリスト10名中9名が男性、女性はわずか1名である。60ほどあった分科会やプロジェクトの座長のうち女性は数名、圧倒的多数が男性であった。これほど、「協働」や「横の関係」をうたいながら、実際その中身は果たしてどうだったのだろう?

ついでに、案内しおりにあった「母子室」の表現が無神経ではないかという声が上がっていたことも加えたい。じつは私自身この言葉に始め何の違和感も感じずにいた。ところが、指摘を受けて、なるほどと思った。「母」子室では、子どもは母親がみるもの、となる。言葉によって人々の意識は作られ、それが行動に現れ、文化となる。単純な○×論になってはいけないと思うが、こうした話題に敏感であることは本質を見失わないためにも大事だと思う。また、LGBTQ、マイノリティ問題がほとんど取り上げられていなかったのも残念だった。

三つ目の感想としては、議論深まりがいまひとつ、という印象が残ったこと。

例えば、私が参加した分科会1「草の根の福祉活動」の内容説明には「個人・団体・教会草の根の福祉活動を支援し、ネットワークを推進します。教会の公益性を高め、教会が社会の必要……にこたえることで、人々へ神の愛を実践します。」とあった。しかし、実際分科会に出てみると、いま流行りの子ども食堂など、いくつかの実践例が報告され、こうした活動を全国的に展開していこうという話でほぼ終わった。もちろん、そうした報告を分かち合い、ネットワークを広げることも良い。ただ、肝心なのは、そうした実践の意味するものを福音との関係で深めていくことだったと思う。それでこそ伝道会議だろう。というのも、いまキリスト教福祉の世界は、言葉や実践はそれらしく聞こえ（見え）ても、その働きの本質にあるもの、その働きが何に依拠しているかなど、福音理解との関係についての確認がないまま、パフォーマンスだけが先走っている現象が多々見られるからである。とくに、クリスチャン政治家と言われる人々の場合影響力が大きいだけに、その言動には注意が必要だと感じた。

次回の会議は7年後となる。いろいろな課題は残るにしても、こうした全国的な集まりが持たれることの意義は大きいと思う。企画段階から、"垂直"の関係と同時に、"水平"の関係ももっと大事にしながら、この時代にふさわしい集まりが持てたらと思う。もしかしたら「伝道会議」という名称も考えてもよいかもしれない。思いつくままに…。

森住ゆき和紙ちぎり絵カレンダー
2024年版ＣＬＣからしだね書店で販売中!!

1,320円（税込）

ＣＬＣ書店便り連載中の
こどものための神のものがたり でも挿絵を描いています

1,540円（税込）

1,210円（税込）

ディボーション誌『manna』の表紙を彩った温かみのあるちぎり絵と、詩・リビングバイブルを毎日味わうことのできる（左）日めくりカレンダー、（右）カードブックです。自分用にも、贈り物にもぜひどうぞ

詳しくは左記へお問合わせください

販売価格
1,000円（税込）

書：ノートルダム教育修道女会　シスターアスンタ福島

チャリティー みことばカレンダー
2024年版
ＣＬＣからしだね書店で
１０月より予約受付開始

「チャリティーみことばカレンダー２０２４」は
聖書のみことばを皆様にお届けすると共に、
経費を差し引いた収益金を災害の支援に全額寄付
することを目的に販売させていただいております。
皆様のご理解とご協力に心より御礼申し上げます。

**森住ゆき和紙ちぎり絵カレンダー・
みことばカレンダー・その他各商品の詳細は
下記へお問い合わせください。**

TEL　075-574-1001
FAX　075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

宇治福音自由教会様、匿名様（順不同）

9月の古書の収益は 35,333 円でした。【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】**献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。**
ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆ 10月になってようやく暑さから解放されたように思います。７月８月には不要だった蚊取り線香も、９月後半あたりから火を点けることが多くなりました。地球沸騰化の怖さを、今年は現実味を帯びて感じる夏になりました。◆この地球を、私達は子どもたちに引き継がなければなりません。人間に託された責任を放棄して、神様任せにしていてはいけない。地球環境を守るために私にできる小さな行動を、今からでも遅くないので、実行していきたいと思います。◆読書感想本では、再度「はだしのゲン」を取り上げています。「新たな戦前」の時代に、私達は子どもたちに、どんな未来を託そうとしているのでしょうか？◆店長は、いのちのことば誌の「京都のすみっこの小さなキリスト教書店にて」という１年間の連載原稿を無事、出し終えました。お読みくださった皆様、本当にありがとうございました。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ 075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店便りのバックナンバーはこちらから
↓